森 哲志

緊急連載 2014ブラジル W杯異聞 4

ブラジル、ドイツ、オランダ、アルゼンチンのベスト４が残って南米ＶＳ欧州となった２０１４ブラジル・ワールドカップ準決勝。14 日の決勝戦は、私の希望ではブラジルとアルゼンチンの対決だった。

６月 29 日からの決勝トーナメント以降、上位チームの激突はトップレベルの迫力を見せつけ、延長戦続出の激戦が続いて、ファンは多いに満足だ。

日本代表が消え去った後、居残り観戦組の日本人サポーターの目当ては、やはり世界的スターのプレー。あのルイス・スアレス（27 歳、ウルグアイ）が出場、噛みつき事件を起こしたイタリア戦もナタルのスタジアムで観戦していたが、会場ではそんなことが起きたなど誰も気づいていない。

スアレスの並はずれたテクニックを期待して見守っていたのに、後で「噛み技」を見せられたと知って、大いにブーイングだ。

一方、お隣アルゼンチンのエース、ＦＷリオネル・メッシ（27 歳）は、期待にたがわぬ活躍ぶり。特に印象に残った試合は、決勝トーナメント・ベスト 16 の戦いの１つ、アルゼンチンースイス戦。

舞台は、サンパウロのメーンスタジアム「アレーナ・コリンチャンス」（６万５千人収容）。超満員のスタジアムを埋めたのは、ほとんど水色のアルゼンチン・サポーター。白い十字架に赤いシャツのスイス勢も目立ちはしたが、アウェー的雰囲気。息詰まる試合に決着をつけたのはメッシだ。

延長後半 13 分、メッシのドリブルからパス、ＭＦディマリアが決勝ゴール。水色のスタジアムが揺れまくった。

アルゼンチン・ブエノスアイレスからは空路３時間。試合が終わると、潮が引くように、水色がサンパウロから消えた。

翌２日からサンパウロではワールドカップにあわせて、「日本祭り」が開催された。ここは日本人が最も多く住む都市で、リベルダージ地区は世界屈指の日本人街。今年はブラジル移民１０６年目である。

県人会活動が盛んで、３・11 津波取材でお世話になった岩手県人会を訪ねると、千田曠曉会長や藤村光夫副会長に歓迎され、ブラジル日本移民史料館に案内してもらった。

そう言えば、第１回芥川賞受賞作は、笠戸丸での移民航海を舞台にした石川達三の「蒼氓」。史料館は２フロアを使った立派な展示室で、戦前篇には、笠戸丸やブラジル丸などの模型、移民草創期の暮らしの模様などを紹介。

「ぼくはこのアルゼンチン丸で、単身、渡って来たんですよ」と藤村さん。色弱の影響で、高校卒業時、職業選択の道を狭められ、それなら広くて大きい大陸で思い切り羽ばたこうと決意したという。戦後篇の中には、ブラジルで羽ばたいた三浦知良選手の京都サンガ時代のユニフォームも飾ってあった。

「地元でワールドカップ開催は様々な声があり、デモをする気持ちもわからないわけではない。ただ移民の歴史を理解してもらう良き機会になりました」と千田さん。

水色のスタジアム
揺れまくる

サポーターで盛りあがった
アレーナ・コリンチャンス

三浦知良選手のユニフォーム

岩手県人会の千田会長（右）と
藤村副会長（左）